

東日本大震災記録集発行にあたって



仙台赤十字病院長 桃野 哲

東日本大震災では、岩手、宮城、福島県の沿岸部が津波で大きな被害を受け、さらに福島では原発事故も重なって被害が拡大しました。多くの被災された皆様にお見舞いを申し上げ、亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。この震災は被災地が広範かつ被害も甚大で、行政が十分に機能できず当初の救援・救護がスムーズに行えなかったことや、電話等の通信がダウンし、一般道路、高速道路、JR、新幹線等が被災して流通が長期間回復しなかったこと、仙台市内でも多くの帰宅難民が生じたこと等々、今後の災害対策に多くの課題を残しました。ようやく予算が付き復旧が始まった所ですが、一日も早く被災地が復興し、被災された皆様の生活が安定して地域が落ち着きを取り戻すことが望まれます。

日本赤十字社は、発災直後から本社や各県支部に備蓄していた毛布や救援セット等の救援物資を被災地に届け、近衛社長は視察のため直ぐに津波の被災地に入りました。3月11日は、各赤十字病院から被災地に向けてDMATが出動、その後は全国の赤十字病院から4か月以上にわたって、岩手、宮城、福島県等の被災地に医師・看護師・事務職等で構成される救護班、約830班が出動して、8万5千人余の診療を行いました。宮城県の石巻地域では、石巻赤十字病院内の対策本部に、石井部長のサポートのため救護の達人が方々の赤十字病院から結集して、多施設から出動して来る救護班をしっかりと組織し、救護体制を確立して、スムーズな活動を行ったことは記憶に残ります。また、日赤は東日本大震災義援金の受付窓口になり、配布に係りました。皆様からのご厚志が多く寄せられて9月には総額が2900億円となり、その9割近くが東北3県の被災地に送られました。義援金が、事務手続きの遅れで早急に被災者の手元に届かず、日赤へのご批判もあって今後の活動に課題を残しましたが、徐々に手続きも進んで、今はほぼ全額が配布されています。

先の宮城県沖地震から30年経過し、宮城県では近いうちに地震が起きるとされ、当院でも災害救護訓練や備蓄、建物、機器の点検整備を行っていました。建物は1983年の竣工ですが、宮城県沖地震後に制定された1981年の耐震基準をクリアしていません。これまでも、宮城県沖地震発災かと思う地震を何度も経験しましたが、今回は比較にならない程、揺れが酷く長くて停電にな

ったので、私は宮城県沖地震だと考えて、直ぐに対策本部を立ち上げて救護所を設置しました。建物は本館と増築棟の接続部が壊れ、廊下の壁が落ちる、耐震壁にひびが入る、玄関回りに段差やひび割れが生じる等の被害を受けましたが、診療に支障が出る程ではなく、入院・外来患者さんや職員に怪我がなかったのは幸いでした。間もなく修復工事が終わりますが、費用は約1億2千万円でした。

発災後、電気、水道、ガスのライフラインが途絶し、電話も通じなくなった中で、院内では副院長が中心となり、各部署に招集をかけて朝夕の連絡会議を立ち上げました。職員の協力を仰いで、当直や夜勤に通常の2倍以上のスタッフを貼り付けて、被災者救護の緊急体制を敷き、院外にはDMATや救護班を派遣しました。この間、多くの皆様、会社、団体等、そして全国の赤十字病院から、多大なご支援を受けました。特に、食料の備蓄が少なくなり、市内のスーパー、コンビニの棚から食料品が消えて、院内で待機中の職員の食事確保に悩んでいた時に、頂戴した大量のおにぎり、パン、レトルト食品等に助けられ、勇気をもらいました。厚く御礼申し上げます。

私は、4月と11月に全国の赤十字病院院長会議で、被災地の状況について報告しました。4月には仙台市内の病院に震災の被災状況や食糧備蓄等についてとったアンケートの纏めを、11月には東日本ブロックの赤十字病院にとった、建物が耐震か否か、食料、水、重油、医薬品や医療材料の備蓄量、自家発電の容量等多岐にわたるアンケート調査の纏めを報告しました。この2回のアンケートの纏めと、1978年の宮城県沖地震時の当院の状況報告を復刻して、参考資料として掲載しましたのでご覧下さい。

当院では発災直後から救護を含めて診療体制の維持と回復に、職員が心を一つにして活動出来ました。そこで、私共の救護活動等を総括した記録集を作り、今後の災害時の行動指針として役立てたいと考えました。院内の震災被害や被災後の活動の詳細については、各部署からの報告をご覧下さい。この冊子が、災害対策や食糧備蓄等の見直しの際に、少しでも皆様のお役にたてばと思います。